
仏頂面の恋天使

遥那智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仏頂面の恋天使

【Nコード】

N4786Z

【作者名】

遥那智

【あらすじ】

内気な女子高生・三条ひなは、クラスメイトの越村に片思いを始めてもう1年。ラブレターを渡そうとしては、勇気を出せずに諦める日々を送っていたひなの前に現れたのは、「恋天使」と名乗る、仏頂面の黒スーツの青年だった――。

第1話 落し物のラブレター

神様、意気地のない私に、ほんのひとかけらの勇気を下さい——
少女はそう願い、大切そうに胸に抱えていた手紙に視線を落とし
た。

今にも爆発しそうな程に激しく脈打つ心臓につられて、呼吸も荒
くなる。

乱れた息を正すため、大きく深呼吸をして、再び下駄箱越しに教
室のドアをにらんだ。

（——今日こそは、この手紙を渡すんだから……！）

「……ひなー、また渡せなかったのぉ？」

緑ヶ丘高校の斜め前に位置する喫茶店「カフェ・クロエ」

大通りに面していて、学校の近くということもあり、いつも満席
状態に近い店内は、今日も賑わっていた。

そんな店内で、ひっそりと窓際に座っている女子高生が2人。

その内の1人、茶髪に限界までミニにした制服スカートをはいた、
今時の女子高生らしい風貌の少女が再び口を開いた。

「あのさあ、ひながそれを大切に持ってたってしょうがないじゃ
ん。

ラブレターなんてモンはさ、渡さないと意味がないんだって」

ひな、と呼ばれた少女は、その言葉に決まり悪げにそっぽを向い
た。

「そんなこと言っただって、越村君、中々1人にならないし、渡す
タイミングが掴めないんだもん……」

小声で言い訳がましく言うひなに、茶髪の少女——ミカは苛立ち

を隠しきれない様子で立ち上がり、勢いよくパンツと机に手をついた。

一瞬、周りの客もミカに気をとられる。

ひなも驚いたように見上げた。

「アンタ今月に入ってから何回チャンスがあったと思ってんの！？アタシがお膳立てしてあげたって「やっぱりダメ」」とか言っただけで逃げるし。

もういい加減ここで白黒ハッキリつけなよ！」

ミカが怒るのも無理はなかった。

ひながクラスメイトの越村に片思いを始めてもう1年。

3カ月程前からミカという強力な助っ人が加わって、なんとか越村と話せるようにはなったものの、そこから先の1歩が中々踏み出せないでいた。

携帯のメールアドレスも聞くことができない、口頭でなんてとんでもない……

ならば、古風な手ではあるが手紙を渡そう、と決心したのが2カ月前。

それから今日までは毎日、ひなは下駄箱の隅でラブレターを渡すチャンスを狙っていたのだった。

もちろんチャンスはいくらでもあった。しかし勇気がなかったのである。

「わかってるけど……」

困ったように見上げるひなを睨みながら、ミカは再び腰を下ろした。

そして腕組みしながら背もたれに体を預け、少し踏ん反り返ったような体勢で、再び口を開いた。

「あのさあ、アタシ越村は結構ひなに気があると思うんだ。

……じゃなかったら、アタシだってこんなに告白するの勧めない

って。

ひなはもつと自分に自信持った方がいいと思うよ」
先程より少しトーンを下げて、そう言う。

その様子に、本気で心配している様子が表れていた。

ミカの気持ちは有難かった。

いつも自分を励ましてくれ、時には叱ってくれる。

だが、ひなにはどうしても行動的なミカのように、振舞えないのだった。

そのことがミカを苛立たせるのも、よくわかっている。

「ごめんね」

結局出てくる言葉は、何に対してもかわからない謝罪の言葉。

そして、この言葉でいつも会話は終わるのだった。

ミカはそんなひなの様子に、大きなため息をつきながら伝票を握り締めた。

「景気付けにカラオケにでも行こつかあ」

また怒らせてしまったと思い込んでいたひなは、その言葉を聞くとパツとその表情を明るくした。

ミカはひなのわかりやすい感情表現に、失笑する。

（——本当のひなは、こんなにカワイイのに）

最初は、ミカもその他のクラスメイトがひなに抱いているのと同じであるイメージを持っていた。

良く言えば、おとなしい。悪く言えば、暗い。

ひなは誰と話す時もいつも俯いていたし、声も小さく、何を喋っているのか聞き取りにくかったからだ。

自分と仲良くなることなど想像すらできなかった。

だが、音楽の趣味が同じとわかってから徐々に話す機会が増え、本来のひなは、明るく素直で、感情豊かな子であることを知ったの

だった。

「バイト代入ったから今日はおごったげるよ」

ミカはそう言つてニヤリとしながら席を立つた。

「わ！大丈夫だよ、いつも迷惑かけてるから私が払うよー！」

伝票を握り締めてレジに向かうミカを追うように、ひなも慌てて席を立つ。

隣の椅子に置いていたカバンを急いで引き寄せ、財布を取り出しながら、レジに向かうミカを追つた。

カバンからヒラヒラと舞い落ちた、1枚の手紙に気付くこともなく――

「越村隆二様」

いつの間にか、人々が行き交うカフェ前の大通りに、不思議な存在感を放つ青年が佇んでいた。

細身の黒スーツに黒シャツというシンプルな装いが、その青年の端正な顔立ちと、スラリとした体軀を際立たせている。

その容姿から、目立ちそうな存在であるはずなのに、その青年に目を与える者は一人もいなかった。

まるで、そこに誰もいないかのように、皆通り過ぎる。

青年もそんな人々を少しも気にする様子はなく、長い足を折り曲げ、優雅に手紙を拾い、その手紙の宛名を読み上げた。

そして、ミカの後を慌てて追いかけていくひなの後ろ姿と、その手紙とを交互に見つめた。

「三条ひな……」

手紙を裏返し差出人を確かめ、何かを決心したかのように、更につぶやいた。

「この少女に全てを託してみましよう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4786z/>

仏頂面の恋天使

2011年12月16日03時53分発行